１００本の花束を

しろくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１００本の花束を

【Ｎコード】
Ｎ７４６５Ｐ

【作者名】
しろくま

【あらすじ】
男爵令嬢のアンはある日突然この国の王子にプロポーズされる！身分違い・・・ってか、なんであたしが！？ちょびっとわがまま王子と心が冷めたご令嬢のらぶすとーりーあんどこめでぃ！

ある日突然

「結婚してくれ」

――――――は？

聞き間違いだと頭を振り、目の前にいる男を見つめる

いやいやいや、

目がまじじゃないか。

「必ず幸せにする」

そう言って私の手をぐっと握りしめ、どんどん近づいて来る顔

「ちょ、ちょっと待ってください！！」

手を振り払い相手の顔をぐっと押しのけると明らかに不機嫌そうな顔で私を見る

「・・・なぜだ？」

なぜって―――それはこっちの台詞だあぁ！！急にキスしようとしといて何を考えてるんだこいつは。結婚って本気で言ってんのか？

「冗談はやめてください」

「冗談ではない」

笑顔であしらうと腕を力強く握られ、思わず眉をしかめる

痛いからはなしてくれ・・・

ため息をついて相手の顔を見つめる

「お気持ちは嬉しいですが、結婚は出来ません」

「なぜだっ！？」

は？理由なんか明らかでしょ

「あなたと私は身分が釣り合いませんもの――――――――――――――――レオナルド王子様」

諦めない！！

私はアン・クウォード。男爵家の娘でなに不自由なく暮らしてきた

お母さま譲りのブロンド混じりの髪に緑色の瞳。自慢じゃないけど、

なかなかの美人だと思う

そんな私も１７歳。ちらほら婚約の話がきていたけど、なんとか切

り抜けてきた。

まあ私のお兄様が裏で手を回していると思うんだけど・・・

好きな人と結婚したいとまではいかないけど、少し理想はある

まぁ、そんな話はおいといて、最近困ってる事がひとつあるの

それはね・・・・・

「お、お嬢さまぁ！」

バタバタと廊下が走る音が聞こえてきたかと思ったら扉が勢いよく

開かれる

「レオナルド王子がいらっしゃいました！！」

・・・・・・また？

―――――――――――――――――――――――――――――――

「お茶がうまいな」

「それはありがとうございます。このハーブティは我が屋敷で育てたものを使用しておりますの」

「そうか」

そんな事より・・・

「レオナルド王子、本日はどのようなご用件で我が屋敷へ？」

「俺との婚約の話だ」

・・・・。一体何回め？えーと、始めてプロポーズされたのがつい先日でそれから毎日屋敷に来てるから・・・うん。とりあえずたくさんだ！

「その返事は昨日もいたしましたわ、お気持ちはうれしいですがお断りいたします」

「・・・いやだ」

この王子子供みたいだな。とゆうか、なんであたしなの？あたし王子と面識ないし、むしろ初対面じゃないか

「私と王子とでは残念ながら身分が違いすぎますわ」

「俺は気にしない」

「気にする、気にしないの問題ではなく回りの方々が認めませんわ」

王族に生まれたときから結婚相手など決まったも同然でしょ？

隣国との同盟のために他国のお姫様と結婚だとか。

それがなかったら王族と繋がりがある爵位が高い貴族の娘とか。

あたしも一応貴族のご令嬢だけど、そんなに身分は高くない

だから釣り合わないって言ってるの

「王子にはもっと美しく聡明な方がお似合いですわ」

関わりがないのにプロポーズって事は王子はあたしの顔がタイプなのか？

レオナルドは何か言いたげに口を開くがすぐに閉じ、わずかに眉根を寄せるとティーカップを机の上に置く

「俺はお前と結婚したいと言っている」

「ですから・・・」

「今日はもう帰る。邪魔をしたな、また明日来るぞ」

来るのかよ

急に椅子から立ち上がりスタスタと歩いていってしまうからお見送りをしていない

王子相手に失礼だったか・・・？

なんでだろ？

漆黒の髪に青い瞳をもつ、この国の第２王子

整った顔立ちに神秘的な空気を漂わせ、周りの人達を惹き付ける

そんな”レオナルド・Ｊ・スチュワート”が最近通っている屋敷があるという。

それは――――――――クウォード男爵家

「また来たぞ」

「・・・・・・ようこそ、王子様」

よく来るなーこの人。飽きない、めげない、・・・うわ～あと１つ揃えば３拍子なのに。

膝をおって挨拶をすれば頬にキスをされた

っ！！！

ぎゃぁあああぁあ～挨拶で頬にキスするほど親密な関係になった覚えはないぞぉおおお！

声にならない悲鳴をあげてるとレオナルドに呆れた視線を向けらる

「いつまで立っている。いい加減座ったらどうだ？」

おいおい。ここはお前の屋敷じゃないだろ、王子だからって偉そうだな

「・・・王子、今日はどのようなご用件で？」

「王子ではない」

――――は？

「名前で呼んでくれ」

・・・名前？

「えーと、レオナルド王子」

「レオでいい」

はははは、それは無理でしょ。王子に向かってレオってあたし何様？

「私には恐れ多くて・・・」

「気にするな」

それでもまだ渋っているアンにレオナルドからの一言

「そう呼ぶまで今日は帰らない」

「わかりましたわ、レオ様」

間派いれずに答えると、レオナルドはうれしそうなそれでいて複雑そうな顔をした

「・・・そんなに俺がくるのが嫌なのか？」

うわー。めんどくせぇ。

「そういう訳ではございません、ただ・・・レオ様はお忙しい身だと存じ上げます。毎日このような所に来て平気なのでしょうか？」

「大丈夫だ。気にしずともしっかり仕事はしている」

てことは仕事の合間に来てるのか。そういえば王子が屋敷に来るのはいつも夕方だなぁ

「それよりも・・・俺と結婚してくれないか」

でたー。また同じ質問てかほんと懲りないなー。そんなにあたしタイプ？はっきり言ってあたし以上の美人そこらへんにごろごろいるっしょ

「何度もいいますが、お断りいたします」

「なぜ？」

というか・・・

「どうして私なのでしょうか？」

「・・・・・は？」

「失礼ながら、私とレオ様ではあまり関わりがないといいますか、このようにしっかりと喋るのはプロポーズされてからです。なのに、なぜ私なのでしょうか？」

呆けた顔でアンを見つめる

「私以外にレオ様に相応しい方はたくさんいますし、レオ様を慕っている方もたくさんいるでしょう」

「――・・・約束を・・いや、なんでもない」

――約束？

「お前の事が好きだからだ」

――好き？

「レオ様・・・」

「・・・返事はまた後日聞きにくる。今日は失礼する、それじゃあ」

いつも思うけど、帰るの早いよね。まぁ、仕事の合間に来てるから仕方ない事だけどさ・・・・ってなんかあたし帰ってほしくないみたいじゃん

やだー誤解されたらどうしよ

レオナルドが帰ってからも同じ場所でぼーとしていたら侍女に心配そうに話しかけられた

「お嬢様、そろそろ屋敷へお入りください。風邪をひいてしまいます」

「そうね」

好き？あたしの事が？あたしの外見が？王子はよく分からん。約束って何？

あぁ～頭ぐわんぐわんする。考えるのやめよかな

「そういえば、お嬢様に王宮からお手紙が来てましたよ」

「王宮から？」

「はい、ウィリアム様からです」

あの人からのお手紙は？（前書き）

アンったらブラコンなのね・・・（笑）

あの人からのお手紙は？

早歩きで廊下を歩く

本当はドレスの
裾を掴んで廊下を爆走したいけどそれは我慢するわ

レディーたるもの優雅に歩くのは基本中の基本・・・なんて今は言ってらんない！！

だって、ウィリアムお兄様から手紙が来てるんだもの！！

部屋に入ると机の上に置いてある手紙の封をわくわくしながら開け
中の手紙を読む

「お兄様からの手紙はひさしぶりだわ」

”” 親愛なるアンへ――――

元気にしてるか？俺は元気にやってる。騎士団へ入団してもうすぐ８年になるが、今は王宮の護衛を任されてるんだ。
だが、もうそろそろ家に帰ろうと思う。クウォード男爵家の跡継ぎは俺しかいないし、父上と母上に心配をかけたくないしな。
そこでだ、アンに俺の騎士の姿を見てもらいたいんだ。
騎士見習いの時はよく練習場に遊びに来ていたが、俺が騎士になってからは一度もないだろう？
アンが来ることを楽しみにしてるよ

――――――ウィリアムより””

アンはその場でくるりと一回転すると大声でメイドを呼びつける

「リリア～！聞いてちょうだい、お兄様がもうすぐ帰ってくるわ！しかも、会いにきてほしいですって！今すぐドレスを用意してちょうだい」

「い、今すぐですか！？」

「もちろんよ！この前新調した桃色のドレスがあったでしょ？あれを着せて頂戴」

「お嬢様、あれは夜会やパーティー用のドレスです。あのドレスを着ていったらウィリアム様も驚かれるのではないでしょうか？」

たしかに、思い出してみればフリルやレースがふんだんについていた気がする・・・・

「この前新調した水色のドレスはいかがですか？桃色のドレスよりはシンプルですが、お嬢様には大変似合っておりました」

少し開いたらデコルテと、薄いシフォンが動くたびに揺れてアンの瞳の色と美貌をより引き立てる

「・・・そうね、それにして頂戴！今からお兄様のいる王宮にいくわよ！！」

「えぇぇぇ！？」

◆◇◆◇◆◇

てちてちと大好きなお兄様に駆け寄る小さな妹

「おにぃさま～！そのにもつどおしたの？」

「これか、俺は今日から王宮の騎士見習いになるんだ」

「きしみならい？」

「あぁ、これから毎日は会えなくなるがたまには遊び戻ってくる」

「あ、あえなくなるの・・・？」

ウィリアムは目に涙を浮かべて見詰めるアンの頭を優しくなでてやる

「泣かないでくれ、アン。出ていきづらいだろ？」

「おにぃさまが居なくなるなんていやだよ～！」

「毎日手紙も書く。アンも俺に会いに来てくれよ」

泣きじゃくるアンのほっぺに軽くキスを優しく頭を撫でてくれるウ

ィリアムをアンは大好きだ

もちろん、今も・・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆

アンは机に膝をついており、むすっとご機嫌ななめだ

「お嬢様、機嫌を直してください。今は夕刻ですから王宮に行くのは無理ですわ、また明日にしましょう」

「・・・・・・・」

「今から行くのは暗くて危険ですもの、ウィリアム様も心配なさりますよ」

「・・・明日朝一に出発するわよ！！」

子供みたいに不機嫌になるアンにリリアは苦笑いしながらなんとか

機嫌を直そうとアンお気に入りのブレンドティを差し出す

アンは小さい頃からウィリアムが大好きだ

見習いから騎士になってからは流石に仕事の邪魔になると想い控えていたが、前までは毎日王宮に会いに行っていた程に

「・・・でも明日もレオナルド王子がお越しになるのでは？」

・・・・・・。

それはあれよ、しょうがない！だって私だって毎日暇じゃないし、予定だってあるし・・・ね！

「まぁどうにかなるでしょ」

「王子の訪問を無視してなんとか・・・ですか」

・・・・・なんとか・・・。

なんでここに！

３人がかりで髪を結い上げてもらい、薄く化粧を施すと急いで馬車に乗り込んだ

運転手に行き先を告げると馬車は走り出す

馬車の中ではアンがドレスの裾をいじったり髪を触ったりとそわそわしていた

「お嬢様、落ち着いてください」

「だって・・・なんか緊張してきたわ！お兄様に会うのは何ヶ月ぶりかしらぁ～」

「何ヶ月って・・・大袈裟な」

ぼそっと呟いた侍女の言葉はアンには聞こえていなかったらしく、不安そうなアンの声は王宮に着くまで続いていた

「お嬢様、王宮につきましたよ」

馬車が止まり扉が開かれるとゆっくり降りていき、ずっと同じ体勢でいて固まった体を伸ばすと周りを見渡す

「はぁ、お兄様はどこかしら？」

キョロキョロしていたらら門番が2人こちらに歩いてきた

「・・・もしかして、アンか？久しぶりだな！」

「ローナン！」

喋りかけてきたのは赤毛の髪の男で、アンの知り合いだ

アンはあまりにもウィリアムにベッタリで毎日のように騎士団に通っていたからアンの事を知らない者はいないぐらい騎士団の中では有名なのだ

「最近見かけなかったが大人っぽくなったな」

「本当？うれしいわ」

「まだお前のブラコンぶりは治ってないのか」

「当たり前よ！お兄様以上にかっこいい男なんていないわ」

さっきから、わいわいと話す2人の会話をぽかんと聞いていたもう1人の門番に気づいたローナンはアンの紹介をする

「こちらはクウォード男爵家のご令嬢、アンだ。あのウィリアムの妹だよ」

「ウィリアムさんの！？僕はネルっていいます！」

ネルはビックリするとにっこりと右手を差し出してきた

「よろしくね、ネル」

にっこりと微笑み握手をするとネルは顔を真っ赤にさせた

「今日もウィリアムに用事か？」

「えぇ、どこにいるか分かる？」

「あいつなら騎士団の本部にいると思うぞ」

「ありがとう、それじゃ」

手を振って去っていくアンをネルは不思議そうに眺めていた

「案内しなくてもいいんすか？」

「大丈夫だろ、あいつは小さい頃からよく王宮に来てたから場所には詳しいぞ」

「そうなんすか、それにしてもアンさんすごい美人でしたね～流石ウィリアムさんの妹」

うんうん、と手を組みうなずいているとローナンは苦笑いする

「あのブラコンぶりがなけりゃあな、あそこの兄妹は・・・」

◇◆◇◆◇◆◇◆

騎士団の方に歩いていくとだんだん騒がしくなり、剣と剣がぶつかる音や掛け声が聞こえてくる

今訓練中かしら・・・

顔を覗かせるとアンに気がついたみんなが訓練を中止して喋りかけ

てきた

「アンじゃないか！みんなアンが来たぞ～！！！！」

「久しぶりだなぁ、元気にしてたか？」

「大きくなったなぁ！」

「立派なレディじゃないか」

一斉に喋りかけられてあたふたとするが顔馴染みに会えたことが嬉しくてアンは笑顔になる

「みんなも元気そうね！」

「おう！アンも相変わらずだな」

「えぇ、お兄様に会いに来たんだけどいるかしら？」

「ウィリアムならさっき下宿所の裏の広場で見かけたぞ」

「わかった、ありがとう」

ウィリアムの側に行くのが待ちきれなくて、小走りで広場に行くと

そこには———

「お兄様！！」

ブロンドの髪にアンと同じ瞳の色をした男が振り返る

「アン！」

勢いよくウィリアムの首に抱きついた、勢いがよすぎてウィリアムは芝生の上に尻餅をつく

「会いたかったわ！お兄様〜」

「久しぶりだな」

満面の笑みのウィリアムに頭を撫でられてアンの顔はデレデレだ

やばい、にやにやが止まらない！！鼻血がでそ・・・

ウィリアムはアンを立ち上がらせドレスについた葉っぱをはらうと自分のズボンもはらう

「手紙届いたか？」

「もちろん！だから会いに来たのよ！」

アンはずっとウィリアムに抱きついたままで離れようとはしない

ウィリアムに夢中すぎてアンは気づいていないのだ、もう1人その場にいる事に

「お兄様大好きよ！！」

そういってウィリアムの頬にキスをしようとすれば、間に手が挟まれた

「随分親密な兄妹だな」

ため息と声がする方に顔を向けると———

げっ！！！なんでここにいるのよ！！？？

「――――レオナルド様」

脱出大作戦

急なレオナルドの登場にビックリし固まっているアンの肩を引き剥がしウィリアムはアンの頭を撫でる

「アン、挨拶しなきゃだめだろ？こちらはレオナルド王子」

「・・・・・・こんにちは」

やっと開いたら口からはこんな挨拶しかでてこない

「今からお前の屋敷に行こうと思っていたところだ。入れ違いにならなくてよかった」

そういってアンの腕を掴もうとするが、アンはサッとウィリアムのうしろに隠れ、レオナルドの笑顔が一気にひきつる

なんでいるのよ、ここに！私はお兄様に会いに来たのであってレオナルド様に会いに来たわけじゃない！！

そんな2人に苦笑いを浮かべながらフォローにまわるウィリアム

「たしか、2人は初対面ではなかったな」

――――――え？
なんでお兄様が知ってるの？

「レオナルド様、自分はまだ任務が残ってるので少しの間アンの相手をしてもらっても？」

「あぁ、もちろんだ」

満足げに頷くレオナルドにアンの思考はとまる。そんな不安感丸出しのアンの耳元にウィリアムは言葉を呟く

「せっかく会いに来てくれたのにごめんな、すぐに任務を終わらせるからそれまで待ってて？」

アンは顔を真っ赤にさせ頷くとウィリアムはレオナルドにアンを差し出す

「レオナルド様、俺の大事な妹ですからよろしくお願いします」

「あぁ」

そう言うとウィリアムはどこかに行ってしまう

取り残されたアンは歩き去っていくウィリアムの背中をその場に立ち尽くして見ていたのだった

◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうしたんだ？」

アンは目の前に出されたお茶やケーキに口をつけず、顔を真っ青にして俯いている

心配そうなレオナルドの声にアンの体はプルプル震えた

ウィリアムがいなくなってしばらく2人は無言だったが、それに耐えかねたレオナルドが「お茶でも飲むか」とアンを屋敷の中に入れたのが始まりだ

アンは今まで王宮には何度も来たことがあるが、行くのはウィリアムがいる騎士団の本部ぐらいで王宮の中には入った事がなかった

こんっっな高そうなティーカップでお茶なんて飲めないわよぉお！！！
しかも部屋にメイドがいすぎじゃない？そんなに王子が心配なの？！
ていうか、部屋の装飾品の数があたしの屋敷と比べ物にならない。
まぁ、王宮と男爵家を比べるあたしが馬鹿なんだけどね？

周りのメイド達は眉をひそめアンをじろじろと観察している
王宮のすごさとメイド達の視線に圧倒されてしまい王子の声も耳に入ってこない

「・・・・い・・、おい！！」

「は、はい！」

はっと気がつくと王子までがこちらをじっと見つめていた

「具合でも悪いのか？」

「いえ、そんな事はございません」

「だが顔色があまり良くないが」

「レオナルド様、私やはりお兄様の事は1人で騎士団の本部で待っている事にしますわ」

出されたお茶やケーキに手をつけないのは相手に対して失礼だが、ここはしょうがない！
どうせあんな人数にじろじろ見られながら食べたって、食べた気しないし

「だめだ、お前の事はウィリアムに任された。なにかあったら大変だ」

王宮の騎士団本部って一番安全な所じゃん・・・

アンは負けじとレオナルドと大勢の侍女達から逃れられる理由を考える

「やっぱり具合が悪くて、みなさんにもうつったら大変だから1人にしてください」

「いや、俺が看病しよう」

王子みずから!?周りのメイド達も一瞬動揺したよ?

いろんな理由をつけてもレオナルドはアンの嘘に気づいたのか引き下がる気配はしなかった

くそぉ〜、こうなったら仕方がない。強行突破だあぁぁあ!!!!!!

「やっぱり治りました。少し外の空気が吸いたいので失礼します!!」

ソファから勢いよく立ち上がりドアを目指して一直線

みんな目を点にして驚いているがそんな事は気にしない!!!

部屋を脱出し、廊下を走り続けなんとか庭に脱出成功した。随分走ったおかげで息は切れその場で立ち止まる

ふと回りを見渡すとそこには色んな色の花がたくさん咲いていた

見たこともない花やアンが大好きな花までたくさんあった

「すごいきれい・・・」

「ここには世界中の花が集まってるからな」

っ！！！

・・・・レオナルド様

「お前は随分と元気だな」

「・・・え、えーと・・」

アンの後を追ってきたはずのレオナルドは全然息を切らしておらず
むしろ清々しい顔をしていた

「・・・走ってきたのに、全然余裕そうですね」

「当たり前だ、体は鍛えてある」

自分は何て当たり前のことを聞いてしまったんだろう

「それより、いきなり部屋を飛び出して一体なんなんだ？」

「う〝・・・」

質問に答えず目を泳がせるアンにため息をはくと、レオナルドはあることを思いついたように口が自然に弧を描いた

「このことはウィリアムに言わなければな」

「っ！！！！」

な、なんだとぉおおぉお！？！？

「クウォード男爵家の娘には一体どのような教育をしているのかと」

「・・や、やめてください・・・！」

キッとレオナルドを睨み付けるが全然怯む様子もなく、むしろおもしろがっているようだ

こいつ性格わるっ！やっぱり王子だから我が儘なのよ。自己中なのよぉお！

「走り出した理由を言えば考えてやる」

しばらく黙っていたがアンは諦めたようにぼそぼそと喋り出す

「・・・緊張したんです」

「　緊張？　」

「・・はい。ティーカップや部屋の装備、すべてにいたって高そうです！しかもなんですか！あの大勢のメイドの数！！あんな人達に見られながらお茶を飲んでもおいしくないし、リラックス出来ません！」

「・・・それだけか？」

きょとん、とした表情のレオナルドにアンもきょとん、としてしまう

「へ？」

「いや、俺と一緒にお茶を飲むのが嫌で逃げ出したのかと思った」

・・・まぁ、それも一理あるけどね

「だが、そうじゃなくて安心した」

・・・・・・・・はははは。

「お前がそこまで言うなら2人で庭でも散歩するか」

・・・・もうなんでもいいっす

それからしばらく庭を案内され、（腰に手をまわされやけにくっついた状態）ぐるっと一週回ったぐらいにウィリアムが任務を終わらせ迎えに来た

「アンおまたせ、ウィリアム王子も妹の世話をありがとうございます」

「気にするな、いつでも面倒をみよう」

腕をつかむレオナルドの手をむりほどきウィリアムの方に走っていくとレオナルドは不機嫌そうな顔になる

「お兄様ったら遅いわ！もっと早く迎えにきてよ」

「ごめんな、いい子にしてたか？」

「もちろんよ」

レオナルド様からの視線が厳しいのは気にしない！

「それではレオナルド王子、俺達はこれで失礼します」

「お邪魔しましたわ、レオナルド様」

ウィリアムの後ろから挨拶をするアンは今日一番のとびきりな笑顔で、レオナルドは少し複雑な想いだった

作戦会議？

それからはウィリアム達の騎士の訓練を見学したり、街へ買い物に行ったりと久しぶりに大好きなウィリアムとの時間が過ごせてアンは大満足だった

「暗くなってきたしもうそろそろ帰る時間になってきたね」

「いやよ！まだまだお兄様と一緒にいたいわ」

「だめだよ、遅くなるとお父様が心配するだろ？」

アンはいっつもこの時間が嫌いだ
ウィリアムと別れる時間

「もうすこししたら毎日一緒にいられるようになるから、それまでの我慢だよ」

「・・・・そうね。それじゃあね、お兄様」

もう少し一緒にいたい気持ちを我慢してウィリアムに抱きつくと大人しく馬車に乗り込み、屋敷へと帰っていく

ウィリアムは馬車が見えなくなるまでその場で見送っていると、すぐそばの木陰からレオナルドが出てきた

「はぁ～、レオナルド王子そんな所でなにやってるんですか」

盛大なため息をつくウィリアムにレオナルドは眉根を寄せる

「今は2人きりだ。普段道りでいい」

呆れた顔で頭をかくと素早く周りを見渡した

「そうだな、それよりも俺のアンはどうだった？」

「お前のではない。だが・・・どうやら俺は嫌われているようだ」

苦笑いするレオナルドの肩を叩く

「アンは”あの約束”を覚えてないのか？」

「・・・・・・あぁ」

「それどころかレオの事覚えてなかったんじゃないか？」

意地悪そうに笑うウィリアムを睨み付けると頭を抱えてしゃがみこむ

「俺はどうしたら・・・」

「う～ん、アピールが足りないんじゃないか？」

「そんなはずはない。屋敷へは毎日かよっている」

流石にここまで悩んでいるレオナルドを不憫に思ったウィリアムは軽くアドバイスを試みた

「押して駄目なら引いてみろって言うよな」

「・・・」

「アンは大事な妹だから、いくらレオでも傷つけたら許さないからな」

「・・・お前達は兄妹のくせに仲が良すぎなんじゃないか？」

「当たり前だろ、兄じゃなかったら俺がアンと結婚してた」

肩をすくめるウィリアムに本気で白けた目線を送ると顎に手を当てて考え込む

「・・・引くのも悪くないかもな」

要らぬ情報ｇｅｔしました。（前書き）

これからしばらく更新が遅くなりそう・・・。
でも、一週間に一回は更新出来るようがんばります（＾＾）／

要らぬ情報ｇｅｔしました。

バタバタとした日々も過ぎ、王宮にウィリアムに会いに行ってから一週間くらいたっていた

「うーん、のどかねぇ」

庭でお気に入りのハーブティを飲みながらくつろいでいると、ふと王宮の花畑を思い出す

（ここも王宮に比べるとすごく地味ね）

自分の屋敷の庭を見渡しながらそんな事を思っていると、はたとある事に気がついた

「そういえば、最近前に比べると静かだわ・・・」

なぜだろう？と首をかしげるアンにメイドのリノアは苦笑いする

「それはレオナルド王子が屋敷に来られなくなったからじゃありませんか？」

「あぁ！それだわ」

やっと諦めてくれたのねっ

嬉しそうにお茶を飲むアンに他のメイドが喋りかけてきた

「お嬢様、王宮からお手紙がきております」

「・・・手紙って・・・もしかして・・」

「はい。レオナルド王子からのお茶会のお誘いです」

嫌な予感的中だ。うわー。行きたくなーい。

「風邪で欠席するわ」

「それはなりません。お茶会へはご参加するようにとご主人様からお伺いしております」

「お、お父様がぁ！？」

私にだけじゃなくてお父様にも手紙を書くなんて、何がなんでもお

茶会に来いとゆう事か

「・・・わかったわ。日にちはいつなの？」

「明日でございます」

ならいっか、とまたのんきにお茶を飲み続けるアンの変わりにリノアが大声を出す

「明日ですって！？こうしちゃいられません！新しいドレスは間に合わないわ・・・前オペラを見に行くために作った淡いピンクのドレスを着ていきましょう！そのかわりメイクや美容に力をいれなければ！！」

何事かと目を丸くしてリノアを見れば、アンの腕を掴み真剣な眼差しで喋りだす

「お嬢様、いまから街へ新しい口紅を買いに行きましょう！それに髪飾りとネックレス、他にも・・・」

あれもこれもと悩み始めるリノアにアンは慌てる

「リノアったら大袈裟よ？いつもの化粧と洋服で十分だわ」

「いけません！！レオナルド王子主催のお茶会に呼ばれるなんてなかなかある事じゃありませんもの！きっと、他にもたくさんのご令嬢が集まるに違いありません！」

「き、きっとそうね・・・」

「こうしちゃいられません！今から街へ行きますよ！！」

「えぇぇ！？」

なんでこんなことにぃぃぃぃぃ？！

興奮したリノアに腕を引かれるままに馬車に乗り込み街へ買い物に出発した

街で常連の化粧品店へ入ると、中からオーナーのマリアが出てくる

「まぁ！アン様じゃありませんの、お久しぶりですわ」

「えぇ、久しぶりね」

軽い挨拶を済ませるとリノアがマリアに事情を説明する

すると、それは大変！と、口紅の色はこっちの方がいいだとかアクセサリーはこっちだと、どんどん着せ替えられる

やっと種類が決まったかとおもい屋敷に帰ったのはもう夕方だった

「も、もう動けない・・・」

そのままベッドに倒れ込み眠りにつこうとしたらリノアに起こされた

「明日は朝起きたあと湯浴みをしていただき、その後は体のマッサージをしてクリームを塗り込み、パウダーを吹き付けたら化粧を・・・」

「わかったから！お願いだから今は寝かせてちょうだいぃぃ～」

アンはそのままお風呂に入りくたくたのまま寝てしまったのだった

◆◇◆◇◆◇◆◇

そわそわと同じ所を行ったり来たりしている王子に王子の護衛第一騎士は呆れたように喋りかける

「レオナルド様・・・さっきから落ち着きがありませんよ」

「今日で一週間は会っていない」

「・・・たったの一週間じゃないですか。俺なんて何ヵ月も会えない事がありましたよ」

「そんな事は知らん！お前は仮にも俺の護衛任務中だろ、ウィリアム。護衛騎士が王子の側から離れるなんて聞いたことがない」

「確かにそうですね」

最近のレオナルドはため息をついてばかりだ

一週間も会ってない。そろそろ会いに行った方がいいのか？だが、それでは引きがたりないんじゃないか？それとも引きすぎか？

ぐるぐると考えすぎて最近のレオナルドは仕事に手がつかない

「・・・途中経過を見るって事でお茶会にでも誘ったらいかがです

か？」

「そ、そうか！ではアンと2人きりのお茶会を・・・」

「いやいやいや！2人きりじゃ駄目ですよ。他の方達も招待してこの屋敷で行いましょう！」

そうしたら護衛役の俺もアンに会える！

緩まる頬を手で隠すが流石は王子。他人の表情を読むのが得意なようだ

「・・・チッ。他の奴等もか。言っておくがお茶会には護衛は不必要だからな」

「・・・・・・・」

「では今から招待状を書いてくる」

執務室を大股で出ていき、私室へ戻る廊下の途中で紙を用意させようと廊下にいたメイドに声をかけようとするが動きがピタッと止まる

向こうはレオナルドに気づいていないのか他のメイド達とお喋りをしていた

「ねぇ知ってる？”絶対に落ちる”女の落とし方ってのがあるんだって。なんでも・・・――――――――――

◆◇◆◇◆◇◆◇

「あ！いたいた。急に部屋を飛び出さないで下さいよ」

まったくも～と近寄ってくるウィリアムにレオナルドは笑顔を向ける

「―――お茶会が楽しみだ」

スキップでも初めそうな程ご機嫌になっていたレオナルドを見て、一体何があったんだろうと不気味がるウィリアムであった

要らぬ情報ｇｅｔしました。（後書き）

ぐふふ（＾ｑ＾）
噂好きのメイドちゃんは何を話していたのやら～笑
ウィリアムは実はレオナルドの護衛騎士なのです！
その事についてもいつか詳しく書ければいいなぁって・・・

お茶会？

こんっっな不愉快なお茶会初めてだわ！！！！！

さわやかな昼間、レオナルド王子主催のお茶会に招待されたアンは１人でお茶を飲んでいた

招待されたのは公爵令嬢のミランダ・ロットーと伯爵令嬢スワン姉妹と大臣の息子のジャック・マリアード

みんなあたしと身分違いすぎ・・・

みんなは顔見知りらしく楽しくお茶を飲んでいるが、アンはこの中にレオナルド以外知り合いはおらずひとりぽっちだ

招待してくれたレオナルドに挨拶をしなければと側に行くが適当にあしらわれ、伯爵令嬢のミランダ達と楽しくお喋りをしている

なんなのよ！！あんたが来いって言ったから来てるのに、その態度は何！？あたしこの中に知り合いいないし。紹介ぐらいしなさいよ！！

そんなアンの思いも知らず、レオナルドはミランダやスワン姉妹と話しているのをアンに見せびらかすようにちらちらと視線を送る

「それでね、レオナルドさまぁ・・・」

「レオナルド様はあたしとお話ししてるのよ！」

「そこの2人は黙りなさい、ねっレオナルド様」

さすが王子様。モテモテだわ。3人の美人に囲まれてさぞや嬉しいでしょうね！

イライラとした視線を送っているとレオナルドとばちっと目が合った。だがアンはおもいっきり視線をそらしそっぽを向く

そんな様子にレオナルドの目は一瞬見開かれるが、またなんでもないように3人達と会話を始めだした

「そう言えば、あの方は誰ですの？」

ミランダはアンを指差してレオナルドの耳に囁く

「あぁ、あれは男爵家のアン・クウォード嬢だ」

「まぁ、男爵家の？どうしてそんな方がここにいらっしゃるの？」

「俺が招待したんだが」

「ふふ、レオナルド様が男爵家の方と知り合いだと初めて知りましたわ」

顔は笑っているが目は笑っていない。レオナルドはミランダの視線を無視してアンの方を見るが、その瞬間、一気に不機嫌になる

レオナルドの視線の先には仲良く話しているジャックとアンがいた

お茶会？

ここにいる意味もないし帰ろうかしら

帰るか帰らないか迷っていると男の人に声をかけられる

「隣に座ってもいいかな？」

うしろを振り向くとそこにはジャックが立っていた

「・・・あ、どうぞ」

「ありがとう、私はジャック・マリアードと申します」

アンの左手をとって挨拶をするジャックをぽかん・・・と見上げたら、くすっと笑われた

はっと我に返って急いで立ち上がり、恥ずかしくて赤く染まった頬を右手で押さえながら自分も挨拶をする

「私はアン・クウォードと申します」

「クウォードと言うと、男爵家の方になるのかな？」

「えぇ、そうですわ」

「初めまして、さっきから1人でお茶を飲んでたからご一緒にと思いまして」

「あ・・・この中に知り合いがいなくて、レオナルド様は他の方とお茶を飲んでいたから1人だったんです」

「そうですか、私も知り合いがレオ以外にいなくて・・・どうしようかと思いましたよ」

大袈裟に肩をすぼめる仕草にくすっと笑みをこぼすと、レオナルドは悪戯っぽく笑う

「あなたは笑っていた方が美しい、さっきまではすごいしかめっ面でしたから」

「えっ！？そんな事ないわよ！」

しまった！つい素がでてしまった！！

恐る恐るジャックの顔を見れば肩を揺らして笑を噛み殺していた

「くくっ、君はおもしろい。どうやら君は仮面を被っているようだな、お互い素を出しあおうよ」

「あなた普段はそんなしゃべり方なの？」

少し呆れて質問すれば、ジャックも呆れたように返事を返してきた

「当たり前だろ？普段から自分の事を私なんて呼ぶ奴いないだろ」

いや、たしかにそうだけどさ。でも君一応大臣の息子でしょ？

「とゆうか、お茶会ってレオは何考えてんだ？」

「さぁ？あの伯爵令嬢の子と仲良くしたいんじゃないかしら」

「だったら2人でお茶しろよ。俺らいらなくね？」

うん！その通り！

あれ？でもなんかもやもやする・・・

「あいつ最近ミランダと仲いいんだよ。ここ一週間毎日会ってたな」

「・・・え！？」

アンの眉間に皺がより、一気に不機嫌になる

「2人でイチャイチャしちゃってさ見てるこっちが恥ずかしいぐらいに」

・・・ふーん。そういう事ね。屋敷に来なくなったと思えば他の女に乗りかえたわけね？最っ低！！！

怒りでわなわなと震えていると、アンとジャックの前に人影ができた顔をあげてみれば、そこにはレオナルドとミランダが立っているではないか

「こんにちは、私ミランダと申しますの。あなたは？」

レオナルドと腕を組み体を密着させた状態で挨拶してきたミランダに、ひきつりそうな顔で必死に笑顔を作りぬく

「私はアンと申します、今日は招待していただいて光栄ですわ。王子様」

レオナルドの眉がピクッと揺れ、ジャックを睨み付ける

「2人は随分と仲がいいんだな」

「あぁ、アン嬢とは気がとても合うんだ。レオとミランダ嬢みたいだろ？」

視線をアンに向ければもはや笑ってはいなかった

「そうですわね、お二人はとてもお似合いですわ」

「なっ・・・」

「お邪魔な私達は帰りましょうか、ジャック様送ってくださる？」

「あぁ、喜んで」

アンの手を取ろうとするジャックより先にレオナルドはアンの手をとるが豪快に振りほどかれる

「王子様、ミランダ様の前で他の女性の手をとるなんてミランダ様に対して失礼ですわ」

レオナルドの眉根の皺は一層濃くなりアンを睨み付ける

「・・・わかった。では俺はミランダを送って行こう」

ミランダに向かって喋りかけてるのに視線はアンに向いたままだ

「まぁ！嬉しいですわ」

可愛く小首をかしげるミランダは勝ち誇ったような顔でアンを見下ろすが、アンはレオナルドを睨みっぱなしだ

「今日はご招待ありがとうございます。とても楽しかったわ、王子様。では失礼いたします」

レオナルドの横を大股で通り過ぎていくアンをジャックはぽかんっとした顔で見ていた

勘違いと早とちり

「くぁ～、やっぱ昼寝は気持ちいいな」

芝生に転がり手足を伸ばしていると足音が聞こえてきた

「おい」

「お、レオじゃんか。お前も一緒に寝っころがれよ？気持ちいいぜ」

レオナルドは不機嫌そうな顔でジャックの横にしゃがみこむ

「どうしたんだよ、そんな眉間に皺寄せて。かっこいい顔が台無しだぜ？」

「――――・・・昨日どうしてた？」

「は？」

昨日はお茶会だっただろ。何いってんだ？こいつ

「クウォード男爵の令嬢を送っていった後だ」

「あぁ！アンの事か？あの後はそのまま自分の屋敷かえったぞ」

どこかほっとした表情のレオナルドにジャックはにやっと頬を緩める

「なんだよ、なんだよ～！ミランダがいるってのにアンに興味あんのか？」

「ミランダはただの知り合いだ」

「嘘つけよ～！最近毎日あいつの屋敷かよってんだろ？ひゅー、あついねぇ」

茶化すように肘でレオナルドをつつくと眉間の皺が一層濃くなる

「は？それはロートナー伯爵に用があったからだ」

「でも最近お前が好きな女の屋敷に通ってるってメイド達が噂してたぞ」

「それは・・・ミランダではない」

「じゃあ誰だよ」

「お前には関係ないだろ」

「教えろよ～」

口を開こうとしないレオナルド。しかし、しつこいジャックに根気負けしたのかついに口を開く

「えええ～！？！？アンにプロポーズしただと！？」

「・・・あぁ」

少し頬を染め照れているレオナルドに顔がひきつる

気持ちわりぃ！野郎の照れた顔なんて見たくねぇよ

「でもそのわりにはミランダとベッタリだったじゃねぇか」

「それは・・・やきもちを・・」

「やきもち！？」

「あぁ、女にはやきもちを妬かせるのがいいっていう情報をしいれた！」

・・・・どっから？

「ミランダと話していればアンがやきもちを妬いて自分に振り向いてくれると思ったのか？」

「あぁ」

「そんなわけね～だろ、馬鹿かお前」

ため息をついて頭をかく

「確かに、やきもちを妬かせるつもりが逆に怒らせてしまった」

そこでジャックは昨日自分がアンに言ったことを思い出す

やべぇ・・・俺余分なこと言っちゃった

「・・・あ、あのな？俺勘違いしてた。てっきりプロポーズの相手はミランダだと思ってたんだよ。だから・・・昨日アンに余分なこと言ったわ。”レオナルドはミランダに夢中だ”みたいな事を・・・」

レオナルドの思考が一気に止まる

「・・・つまりアンはレオナルドとミランダが婚約したと勘違いしたのかも・・・」

言うや否やレオナルドは勢いよく立ち上がり走り出した

勘違いと早とちり（後書き）

全話を読み返したら文がぐちゃぐちゃだった・・・

うん。しょうがない！

だって、書くの初めてなんだもん！

皆様おおめにみてください（Ｔ－Ｔ）ｑ

気持ちの変化、胸がドキドキ！？

さっきからリノアがちらちらこっちみてるわ、そりゃそーよね。いつも優しく可愛らしく美しい仮面を被ってる私がこんなにもイライラしてるなんて、珍しいものね！！

アンは気持ちを落ち着かせようと庭でお茶を飲んでいるが、昨日のイライラは全然収まらない

「お、お嬢様？どこか気分でも・・・」

「いいえ！全然悪くないわ！」

「し、失礼いたしました」

リノアに八つ当たりしてしまったぁあ！違うのよ、リノア。あなたが悪いんじゃないわ、悪いのはレオナルド王子なのよ！あのくそったれがぁぁぁあああ！！

顔を真っ青にして側に控えるリノアに謝ろうと振り向くと、なんだか向こうの方が騒がしい

ん？もしやあれって・・・

ここにいるはずのない人の姿にアンは固まる

「アン！！」

行く手を阻むメイドを押しきってレオナルドはアンの前に片膝をつくと右手を左胸にあてる

「俺が悪かった、許してくれ」

突然の出来事に頭がついてこない

え？まって。なんでここにいるの？てか、悪かったって？許してくれですってぇぇぇ！？

目の前にいるレオナルドを睨み付ける

「王子様ではありませんか、今日はどのようなご用件で？」

「昨日の事だが・・・」

「あぁ！ミランダ様との婚約おめでとうございます。王子様は誰にでも簡単に好きだと言ってしまわれる方だったんですね」

「違う！それは誤解なんだ！」

「誤解？昨日はとても仲がよかったではありませんか」

「それはっ・・・」

モゴモゴと小声で何を言ってるか聞きとれない

レオナルドの顔が一気に赤くなり大きくゴホンッと咳払いをする

「とにかく、昨日ジャックが何を言ったか知らないが俺はアンにしか婚約を申し込んでないし、アン以外と結婚したいと思っていない」

・・・・・。で、で、でも最近屋敷に来なくなったし、ジャックがミランダ嬢の所に通ってたって・・

改めてプロポーズをされると恥ずかしい。今度はアンが赤くなる番だ。聞きたいことはいっぱいあるが、口に出すのを戸惑う

「確かに、伯爵邸には通っていたがミランダに会いに行った訳じゃない。ロートナー伯爵に用があったんだ」

・・・レオナルド様って人の心読めるのか？

「アンは俺に怒ってるか？」

レオナルドは少し口を尖らせ、心配そうな顔でアンを覗き込む

その瞬間迂闊にも胸がきゅんっと来てしまった

「え、えっと・・・もう怒こっていませんわ」

レオナルドは心から嬉しそうに笑うと、立ち上がってアンの両手をつつむ

「よかった！アンと仲直りができた。許してもらえなかったらどうしようかと思ったんだ」

ちよっと！ち、近いわ！そんな笑顔で見つめられるとっ・・・！！

レオナルドの体をどんっと突き放す

「ア、アン？」

「失礼しましたっ！！あまりにも、その・・・」

真っ赤になってうつむきゴニョゴニョ言っているアンを不思議に思っていると、側に控えていたリノアがレオナルドにお茶を入れる

「レオナルド王子様、せっかくですからお茶をどうぞ。お嬢様もおかわりをいかがですか？」

ナイスフォロー、リノア！

リノアに心から感謝してお茶のおかわりをもらう

「まともに喋るのは1週間ぶりだな」

「え、えぇ。王子様は忙しい方ですものね」

「せっかく仲直りしたんだ、レオナルドって呼んでくれ」

「・・・レオナルド様」

恥ずかしい！！なんでだろ？今日はすごい胸がドキドキするわっ

心底ほっとした表情になったレオナルドはアンの髪を一束手繰り寄せる

「・・・ずっと会いたかった、やはり1週間というのは長いな」

ぼんっっ！！とアンの頭から湯気がでる

も、もうむりっす。

そのままアンは勢いよく立ち上がる

「申し訳ありません、レオナルド様。今日は少し気分が悪いので失礼しますわ！！」

言うが否やぽかん・・・とした表情のレオナルドをその場に残してすばやく走り去っていった

どうしたねかしら！？あたしは。胸がドキドキするわ～～～！！

気持ちの変化、胸がドキドキ！？（後書き）

やっと進展アリ！！
少しだけだけどね（笑）

コイって何？

「はぁ・・」

さっきからため息が止まらない

「ねぇ、リノア。あたしどうしたのかしら？昨日レオナルド様を見ていたら胸がドキドキしたの」

今まで喋っていても何とも思っていなかったのに・・・むしろ、毎日コイツうっとおしいなー。よく来るなぁ！ってぐらいにしか思っていなかったのに

「お嬢様、それはレオナルド王子に失礼です」

とか言いながら、リノアったら少しニヤついてるわね？

「謝られた時、絶体許すもんかと思ったのに・・・よくよく考えれば、レオナルド様が誰と話してようがあたしには関係ないわ」

なのに、なんであんなにイライラしたのかしら

「あ、リノアあの時は八つ当たりしてしまってごめんなさいね」

「いえ、私こそもっとお嬢様の心を考えるべきでしたわ」

リノアはあたしの隣に腰かけて優しく手を握ってきた

「お嬢様はレオナルド王子がミランダ様と仲良くお喋りをしているのを見て胸がモヤモヤしたのですね？」

「え、えぇ」

「あたしに好きって言ったのにあれは嘘だったの？とも思った」

「そうね」

「ここ1週間会いに来てくださらなくて、とても悲しかった」

「いや、それはないわ。」

キッパリと言い放つアンに、あれ？とリノアはアンの顔を思わず見つめてしまった

「え、えーと。でも、悲しくないのはレオナルド王子がしばらくし

たら会いに来てくれるという安心感があったからですか？」

「うーん。安心感・・・あったかしら・・・」

するとリノアはバッと立ち上がり嬉しそうに人差し指をアンに突きつける

「お嬢様、それは恋ですわ！！」

「・・・コイ？」

「えぇ、他の女と話してると胸がもやもやする・・・つまりそれは嫉妬ですわ！あの人の笑顔を見てるときゅんっとしたり、一緒にいると無条件で安心する！これは間違いなく恋ですわ」

「ちょ、ちょっと待って―――あたしがレオナルド様に恋！？」

あるはずがないわ、だって相手はこの国の第二王子よ！？

「確かに王子様ですが、向こうはお嬢様に夢中じゃないですか」

それに恋愛に身分は関係ありません！！

いや、あるわよ・・・

ガッツポーズを作るリノアに心の中で突っ込みをいれながらも頭は困惑中だ！

「でも、レオナルド王子の事お嫌いではないのでしょう？」

「まぁ・・それは・・・」

「今は恋とまではいかない、というなら気になる人ってとこですね」

・・・気になる・・

「ご自分の気持ちをゆっくり考えてください」

そんなリノアの言葉にあたしの頭は困惑した

う〜〜〜〜。恋？濃い？鯉？コイってなにぃ！！？？

思わぬ真実

「そういえばお茶会どうだった？」

「・・・お茶会は最悪だった」

お茶会はって事は他に何か良いことがあったんだな

ウィリアムは自然と口の端が上がる

「アンとなんかあったのか？」

「仲直りした」

「仲直り！？って事は喧嘩でもしたのかっ！？」

俺の愛しの妹になにしたんだこの野郎！泣かせたりしたらだだじゃおかねぇぞ

「・・・心の中で言ってるつもりだろうが、うっかり口にでてるぞ」

「それはよかった。これで俺の気持ちがレオに伝わっただろ？で、何があったんだ？」

ものすごい睨みで詰め寄られると、いくら幼馴染みでも迫力があるな

なんてどうでも良いことを考えていると、さらに睨み力が増す

「実は――――――」

「あっははは！そんなメイドが言ったことをうのみにしたのか！？レオは変なところで真面目だな」

お腹をかかえて笑うウィリアムを今度はレオナルドが睨み付ける

「うるさい」

「そのヤキモチ作戦でヤキモチを妬かせるつもりが逆に怒らせたって？」

「あぁ」

ウィリアムはまだ笑っている

「でもそのメイドが言ってた事あながち間違いでもないじゃないか」

「どこがだ？」

「だってヤキモチを妬いたからレオナルドに怒ってたんだろ？」

自分に婚約を申し込んできた男が他の女と話してるのを見て怒るって事はレオの事気にしてるってことだろ？

レオナルドは目を見開いてウィリアムの肩をつかむ

「そう思うか！？」

「レオの事どうでもいいって思ってたら怒らないし、むしろ誰と喋ってようが関係ないって無関心になるだろ」

レオナルドは緩む口元を左手で隠し、疑問に思ったことを口に出す

「アンがよく突然走り出すのはなぜだ？」

「あぁ、それは都合が悪くなったときにする癖みたいなもんだな」

アンは昔っからそうなんだ

ウィリアムは苦笑いする

「まぁ、とりあえずはよかったな！でも、あんまアンに心配かけるなよ」

「わかっている」

どこか嬉しそうに笑うレオナルドをウィリアムは心の底から応援したいと思った

こんなシスコンな兄貴が妹の恋愛を応援するなんて意外だって？

確かに相手がレオじゃなきゃ大反対だな

でも、レオはいい奴だしさ

アンの初恋の相手だから

思わぬ真実（後書き）

続けて３話更新しました。
本当は１話だけ更新予定だったのですが物語を書いてると、
あれ？文章短いな・・・もう１話書くか！
というノリで３話です（＾＾）ｄ

誤字・脱字があるかもしれませんが、がんばりました！

気づかない気持ち

あの日からレオナルド様の事をみょ～に意識してしまう

前までは2人きりで喋っていてもなんとも思わなかったのに

これは絶対リノアの影響だわ。そう、絶対にそう。だって・・・私がレオナルド様にこ、こ、コイだなんてっ！！！

恋って好きってことでしょ？お兄さま以外の男の人を好きになるなんてありえない！！

「お嬢様、レオナルド様がいらっしゃいました」

う゛っ！！

「お嬢様？」

「なんでもないわっ！部屋にお茶を用意してちょうだい」

なんなの、この胸のドキドキは！？

「久しぶりだな、アン」

あれからレオナルド様はあまり屋敷に来なくなったのよ
まぁ、毎日通っていた時もあったけど流石にそれは異常よね
最近は2、3日に一度だわ

「久しぶりって、つい最近会ったばかりですよ」

「本当は毎日会いたいけれど我慢してるんだ。最近仕事が忙しくてな」

「仕事に熱中しすぎてお体を壊さないようにお気をつけください」

「あぁ」

それからしばらく、たわいもない会話を繰り返す。ほとんど毎日会っているのに会話が途切れる事はない。レオナルド様って以外によく喋るんだな…って考えていたらつのまにか夕刻になっていた

「もう夕刻か。そろそろ帰らなければな」

「もうそんなお時間ですか」

玄関まで送っていこうと椅子から立ち上がるが、レオナルドは椅子

に座ったままだ

「どうかなさいました？」

「え、とだな。・・・俺は今いろいろと仕事がたまってて今週はもう会いに来ることができないんだ・・・」

ってことは会えるのは６日後・・・？べ、べつに寂しがってるとかじゃないわよ？！

「だから・・・その・・・」

レオナルドはアンの目を見れずに机に置かれたティーカップを見つめたまま喋っている

「アンさえよかったら・・・会いに来てくれないか？」

――――え？

「アンとお茶をするくらいの時間ならいつでも作れるんだ。・・・ダメか？」

つまりあたしと6日間会えないのは寂しいから会いに来てくれってこと？

アンの顔が一気に赤くなる

「ダメではありません・・・が、あたしなんかが行ってお仕事の邪魔になりませんか？」

「アンが来てくれたら逆に仕事がはかどる」

また胸が高鳴る。

「わ、わかりましたわ」

「本当か！？」

「えぇ、随分驚かれるのですね」

くすっと微笑んだらレオナルドは顔を一気に赤くした

「俺はいつも書斎か私室で仕事をしているから」

「わかりましたわ」

「では、待ってる」

レオナルド様が帰っていく姿を見ながらアンは両手を頬に当てる

「・・・わたし、どうしちゃったのかしら」

気づかない気持ち（後書き）

気づきました。アンと仲がいいメイドの名前が”リリア”↓”リノア”になってた・・・泣

キャラ設定がぐたぐただぁ～

秘密の扉

お風呂に入った後メイドに乾かしてもらった髪を手でときながら、
窓辺にある椅子に腰掛け月を見上げる

今日1日の事を振り返っているとズキンッと頭が痛んだ

窓ガラスに写った自分

夜間ドレスの深く開いた襟から覗く消えない傷痕

白い肌に赤い傷は目立つ

――――――小さい頃の記憶

17年間生きてきた中で欠けた記憶がある

ウィリアムに会いに行った王宮で誘拐にあった

幸いすぐに王宮の騎士団の人達が駆けつけ救いだしてくれたらしい
が、その時のショックで誘拐された記憶がない

私の体が拒絶する

思い出したいけど、思い出したくない記憶

どれくらいそうしてたんだろう

窓に写る自分を見つめているとドアがノックされた

返事をし、開かれたドアの先にはリリアがいた

「ラベンダーのアロマをお持ち致しました」

「・・・ありがとう」

「これでリラックスして眠れますよ」

ベッドの側にある棚にアロマをセットする

「・・・まだ思い出せないの」

呟くような小さい声にリリアが振り向く

「――――あの時の記憶を・・・無理に思い出す必要はありません、ゆっくりと時がきたら自然と思いしますわ」

優しく微笑むリリアに心が暖かくなった

「そうね――――でも、何かが心に引っ掛かるのよ」

あの時、誘拐された時私は1人じゃなかった

でも一緒にいたのが誰で、何をしていたのか思い出せない

――――その人は・・・

「お嬢様、無理はなさらないでください。体に悪いですわ」

「・・・リリア」

「記憶はいつかきっと思い出せる日がきますわ、・・・それより明日はレオナルド王子に会いに行くんですわよね？」

リリアの言葉で思い出す、昼間レオナルドと交わした約束

「そうだったわ！でででも、今日会ったばかりなのに明日会いに行くのも変じゃない？」

まるで、会うのが我慢できないみたいじゃん

「そんな事はございませんわ、それにレオナルド王子はきっと大喜びなさりますよ」

なんたってアンお嬢様に夢中なんですから

そう言ってパチンと目をウィングするとアンは真っ赤になる

「〜〜〜〜〜っ」

「さぁ、今日はもうお休みになってください。明日は王宮に行かれるのですから」

「まだ行くって決めた訳じゃないわ！」

素直じゃないアンにリリアは苦笑いをうかべた

「わかりましたわ、では私は失礼いたします」

「・・・お休み、リリア」

「お休みなさいませ、お嬢様」

リリアセットしてくれたアロマのおかげでアンはすぐにぐっすり眠ることができた

恋のライバル？

「ねぇ、今日のレオナルド様のご予定は？」

「本日は王宮内で執務とお伺いしております」

「あら、ここには来ないのね」

ピンクの扇で口元を隠しながらため息をつくとティーカップに手を伸ばす

「最近我が屋敷に通ってくださっていたのに・・・レオナルド様」

レオナルドの事を思いまたため息をつくと側にいたメイドにお茶のおかわりをもらう

「はぁ・・・愛しのレオナルド様、早くあなたに会いたいわ」

机の上にある写真立ての中のレオナルドをうっとりとした眼差しで見つめているとメイドが口を開く

「ミランダ様、レオナルド様は想い人がおられるそうですよ」

「・・・は？」

「その方に婚約を申し込んでいる、と噂を聞きました」

「な、なんですってぇ！？相手は誰なの！？」

鼻息荒く大きな音を立ててティーカップを机に戻すと顔を真っ赤にさせてメイドに詰め寄った

「相手はクウォード男爵家のご令嬢のアン様と聞きました」

「男爵家のアンって・・・！！あんな小娘に求婚だなんて！！レオナルド様は一体何を考えているのかしら！？」

握りしめている扇を床に思いっきり叩きつける

「ミランダお嬢様、落ち着い・・・」

「認めないわ！絶対に！！あんな子のどこがいいのよ！！」

「ミランダ様・・・」

「今すぐに支度をして頂戴、レオナルド様に会いに行きます。そんな噂は嘘に決まってるわ！えぇ、絶対に嘘！」

この前のお茶会でもあの子より私に夢中だったし、あんな子より私の方がずっと美しいもの！

アンとは違い均等に輝くブロンドの髪に水色の瞳

ミランダは急いで馬車に乗り込むと王宮まで行くように命令する。伯爵邸から王宮まではあまり遠くはないのだ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

レオナルドは自身の執務室で仕事をこなしていた。机の上に積まれた大量の書類に目をとうし、別の書類を書き上げていく

いつもとは違い集中して仕事をこなすレオナルドだが、さっきからひとつ気になることがあった

ちらちらと時計を見る仕草を頻繁におこなうレオナルドについにウィリアムが口を開く

「まったく・・・わかりましたよ、そんなに休憩したいならどうぞ」

「は？」

「さっきから時計をちらちら見て、そんなアピールの仕方しなくても休憩なさりたいならそう言ってください」

「そうだぜ、レオ。仕事のしすぎは体に悪い」

ソファーに優雅に腰をかけお茶を飲んでいるジャックにため息をはく

「なんでお前がここにいるんだ？」

「遊びに来たぜ！ほら、お前もこっちに来て一緒に茶でも飲もう」

「別に休憩したいわけではない」

「嘘つけよ、じゃあなんであんなに時計を気にしてたんだよ？」

「そ、そそそんな事お前には関係ないだろ！」

「ははーん、怪しいな」

じろじろ監察してくるジャックにレオナルドは余計にあわてふためく

「ウィリアム！お前は俺の護衛だろ！なんでジャックを勝手に部屋に入れたんだ！？」

「いや、今日は知り合いが来るかもしれないから、来たら執務室に

通せと言ったのはレオナルド様じゃないですか」

「う゛！そう言ったが・・・俺の言っていた知り合いはジャックではない」

「じゃあ誰だよ？」

「お前には関係ないだろっ」

3人でもめていると部屋がノックされ、メイドの声が聞こえる

「レオナルド様、お客様がいらっしゃっていますがお通ししてもよろしいでしょうか？」

「っ！　あぁ！いや、ここではなく俺の私室に通してくれ。俺もすぐに私室へ向かう」

「俺の事を放っておいてどこ行く気だよ？」

「お前とはいつでも会えるからな、ウィリアムはここにいてジャックの相手をしていてくれ。俺は少し席を外す」

そう言うと速歩きで部屋を飛び出していき、私室へ向かう

「・・・ありゃぁ絶対女だな」

「ですね・・・」

恋のライバル？

ふぅーと大きく深呼吸。なんだかんだ言って来てしまった王宮

あれ？私、お兄様に会う以外の目的で王宮に来たの初めてかも

とか、どうでもいい事を考えながら気をまぎらわすのはきっと緊張を隠すため

ゆっくりと進んでいくと、こちらに気づいたメイドが頭を下げて出迎える

「こんにちは。レ、レオナルド様に会いに来たのですが・・・」

「ようこそいらっしゃいました。アン様、こちらへご案内いたします」

メイドはレオナルドから何か聞いていたのか、そのままアンを執務室に案内した

「レオナルド様、アン様がお越しになりました」

扉をノックしても返事がなく、もう一度呼び掛けてみたがまた返事がない

レオナルドに今日は一日中執務室にいる、と聞いていたメイドは返事がない事を不思議に思いドアノブに手をかけようとしたが、その瞬間ドアが勢いよく開いた

「ご、ごほん。今は少し手が離せなかったんだ。え～、と」

ぐしゃぐしゃな髪に半開きの目、そして口から垂れているよだれ

「ジャック・・・あなた絶対寝てたでしょ」

「いやいやいや！そんな事はない！断じてないぞ！って・・・あれ？お前なにやってんだ？」

何って・・・レオナルドに会いに来たなんてのは恥ずかしくて絶対言えない

少し頬を染め口ごもっていると、ジャックはアンがここに訪れた理由を察したらしく急にニヤニヤしだした

「そうか～、まぁ中に入って茶でも飲んでけよ」

「ここはレオナルド様の執務室なのに、なんでそんなに偉そうなのよ。ところで、レオナルド様は？」

「あぁ、あいつは・・・今ここにはいない。急な客人に会いに行ってる」

眉をピクッと動かしたメイドはくるりと向きを代えアンと向かい合う

「失礼いたしました、アン様。ではそちらの方へご案内いたします」

「ちょ、ちょ、・・・！」

ジャックは慌ててアンの腕を掴み、掴まれたアンもびっくりしてジャックの方に振り向いた

「今は・・・先客中だろ？！そんな所に行ったら相手のお客さんに失礼だ！レオナルドが戻ってくるまでここでゆっくりしてようぜ！？」

どこか必死なジャックを怪しく思いつつも、たしかにそうだな・・・と考えていたらメイドがジャックの前に立った

「失礼いたします、ジャック様。レオナルド様よりのご命令で”どんな急用な会議に出ていてもアン様が来たらすぐに知らせるように

”と言いつけられておりますので、そのような事はできません。」

言い返す言葉もなくぽかん・・・とメイドを見つれていると一度ジャックに向かってお辞儀をした

「では、アン様。こちらへご案内いたします」

「え、えぇ」

執務室の前の長い廊下を歩いていくと中庭が見えた。色んな花が咲いており、中心にある噴水がとても綺麗だ

そういえばこの前レオナルド様に中庭を案内してもらったわ・・・

「レオナルド様はどこにいらっしゃるの？」

「執務室にはいらっしゃらなかったので、私室だと思います」

・・・私室！？

レオナルドの私室へ行くと考えるとさらに緊張感が増した

「レオナルド様はこの中庭が大変気に入っておられまして、部屋の

テラスからいつも景色を眺めておられるのです」

「そうなの・・・」

そういえば、庭を案内してもらっていた時すごい嬉しそうな顔をして花達の説明をしてた気がする・・・
そんなしっかり覚えてないけどね、だってあの時は早く帰りたくてしかたなかったもの

「着きました、こちらでございます」

大きな扉をノックしようとしたら中から声が聞こえてきた

『・・・・美しいな』

『そう言ってもらえると嬉しいですわ』

『もっと・・・・こちらに』

女の声が聞こえた
妙に甘ったるく、どこかで聞いたことがある声

「レオナルド様、アン様がいらっしゃいました」

すると中から騒がしい音が聞こえ、扉を開いた先にいたのは――――

「あら、お久しぶりね」

「・・・ミランダ様」

「いやだ、私の事はミランダとお呼びになって？アン」

「アン！来てくれたのか！」

嬉しそうな顔、でもどこか複雑そうな顔をして近づいてくるレオナルドに胸が傷んだ

「え、えぇ・・・ですが、私はお邪魔のようですわね」

アンの態度に焦ったレオナルドはそんなことない、と声をあげようとしたがそれよりも早くミランダが口を開いた

「そんなことないわ、私はいつでもレオナルド様と会えるから気にしないで。ではレオ様、今日はこれで失礼いたしますね」

優雅にその場でお辞儀をすると満面の笑みをレオナルドに向け去っていった

その場に立ち尽くしているアンに中に入るように促すが、アンはそこから一歩も動かない

「どうした、そんな所に立ってないで部屋に入ったらどうだ？」

中を覗くと2人分のティーカップに食べ終わったお菓子

アンは何故か胸が悲しくなった

「いえ、私は・・・帰ります」

「え！？せっかく会いに来てくれたばかりじゃないか」

「はい、ですがレオナルド様は仕事で忙しいのでは？」

「そうだが、アンと話すくらいの時間は取れるといっただろ？」

「・・・私の変わりにミランダ様と喋ってたじゃないですか」

ぼそ、と呟いた言葉はレオナルドには届いておらず自然と顔がうつ

向いてしまう

部屋から聞こえてきた言葉がアンの頭で何回も繰り返される

あんな言葉をだだの友達の女性に言うはずがない

だが、ミランダ様の事はなんとも思っていないとレオナルドは言っていた

じゃぁ、あの言葉は何！？

怒りよりも悲しみが胸に広がった

「・・・やはり今日は失礼します」

「ア、アン？」

「この場に来ておいてなんですが、少し体調が優れなくて・・・レオナルド様との約束だから少し無理をしました。また後日お伺いします」

不安そうなレオナルドを納得させるように微笑むと直ぐにその場を

立ち去った

恋のライバル？

「あ～首がいてぇ」

寝違えたかもしれない首を左右に回すとゴキッと骨がなる音がした

それにしても、レオナルドやばいんじゃないか？俺の予想が正しければレオの先客は・・・

「あら、ジャック様じゃない」

「・・・ミランダ嬢」

廊下を歩いていたら、見知った声が聞こえた。前から現れた女性を認識した途端自然と顔が歪む

「久しぶりね、お元気？」

「えぇ」

「そんなに警戒なさらないでよ、私とジャック様の仲でしょ？」

くすくすと小首をかしげるミランダをジャックは睨み付ける

「今日はなんの用でここに来たんだ？」

「もちろんレオナルド様に会いに来たのよ」

当然でしょ？と馬鹿にしたように鼻で笑うミランダをこれ以上相手にしないとこうとその場を通りすぎるが思わぬ言葉に脚の動きが止まった

「アンっていったかしら？あの子・・・レオナルド様に相応しくないわね」

「・・・なんだと？」

「ふふふ、相応しくないわ」

それだけ言うとミランダはその場を去っていった

ミランダの残していった意味深な言葉をしばらく考えていたら肩をぽん、と叩かれる

「ジャック、そんな所でどうしたの？」

「アン・・・レオナルドに会いに行ったんじゃないのか？」

「あー、えぇ。でも忙しそうだったから帰ることにしたの」

どこか寂しそうに笑うアンにジャックは舌打ちをしたくなった

――――この様子じゃミランダとなんかあったな

「じゃぁ、俺の用事に付き合ってくれよ」

「・・・用事？」

「そうだ、どうせ暇だろ？」

確かに今日はレオナルド様に会いに行く以外なんの予定もないし、レオナルド様とのお茶も無くなったから暇だけど

「いいわ、けど用事って何？」

「ついてくれば分かるよ」

ぐっと手を引っ張られ思わずドキッとした

廊下を真っ直ぐ歩いていくと南京錠がかかっている扉があり、ジャックはその前で足を止めた

「あれ？ウィリアムの奴まだ来てないのか」

「・・・ウィリアムって――」

「あ！いたいた！遅いぞ～」

後ろを降り向けば鍵を握って走ってくる男性が見えた。その姿を捉えたアンは嬉しさに顔が緩む

「お兄様！！」

「アン！！」

「えぇぇえ！？お兄様って・・・兄妹！？」

感動の再開と言わんばかりに目の前で繰り広げられたアンとウィリアムの抱擁にジャック情けない声をだす

「どうしてここに？俺に会いに来てくれたのか？」

「あ・・・用事があって王宮に来たんだけど、お兄様に会えてよかったわ」

「おーい、取り込み中悪いけどとりあえず鍵をかしてくれ」
アンの頭をよしよしと撫でるウィリアムに呼びかけると、ひどくめんどくさそうに睨まれた
「わかってる、ほら」
「お前口調変わってるぞ」
「いいだろ？幼馴染みなんだし、今はアンと俺と3人なんだから」
たしかにそうだな、と頷くと丁度南京錠が開く
「この部屋はなんなの？」
「入ればわかるよ、少し暗いから足元に気を付けてね」
ウィリアムにエスコートされながら部屋に入る。薄暗く、少し埃っぽい臭いがした
シャーッと大きな音がしたと同時に光が部屋に入り込んだ。ジャックが開け放ったカーテンと窓が眩しくて目を細めればそこには・・・
「すごい・・・、ここってもしかして図書館？」

大きな棚に数えきれない程たくさんの本達が並んでいる

「あぁ、びっくりした？」

「すごい量の本達ね、私こんなにいっぱいの本初めて見たわ・・・」

「それだけ歴史の古い本達が眠ってるってことだな」

「そんな大切な所に私達入ってもいいの？」

心配そうな顔をして周りをキョロキョロするアンにおもわず笑みがこぼれた

「大丈夫だろ。親父からの許可取ってあるし、本当に大切な本はここにはないしな」

「あぁ、そういった価値のある本は我々騎士達が責任をもって管理しているんだよ」

そうなんだ・・・やっぱり王宮だけあって管理がしっかりしてるのね

ウィリアムはアンの頭を愛しいそうにぐりぐりと撫でまわす

「じゃあ俺はそろそろ騎士団に戻らなきゃ」

「え！？せっかく会えたのに・・・屋敷にはいつ帰ってくるの？」

「そうだな・・・まだ最後の任務が残ってるんだ。それが終わったら屋敷に戻ろうと思ってるから、それまで待っててて？」

「――――おい、ウィリアムそれって・・・」

何か言いかけたがジャックは口を閉じた

「ジャックとアンを2人っきりにするのは心配だな、俺の大事なアンに手を出すなよ」

「分かってる」

「じゃあな、アン。気を付けて帰るんだよ」

ウィリアムはアンの頭にキスをするとそのまま去っていき、ジャックはぽかんとした顔でウィリアムの背中を見つめていた

「・・・・お前んとこ仲良すぎじゃね？」

「そうかしら、普通よ。それより手伝いって何？」

忘れてたとでも言うように手を叩くとポケットから紙を出し、それ

をアンに手渡す

「親父に頼まれてた事は”本探し”。この図書室の中から本を探してきてほしいってさ」

手渡された降り曲がっている紙を開いて見てみると、そこには本の名前が書いてある

「”南の王国と東の諸国”？」

「あぁ、本人はどこにしまったか覚えてないから地道に探すしかないんだ」

「・・・この中から探すなんて丸一日かかりそう」

「本には緑の表紙にドラゴンの絵が書いてある、地道に探してこうぜ」

「そうね、じゃあ私はこっちの棚を探すから向こうの棚をお願い」

「りょ～かい」

二手に別れて探し始め、1時間ぐらいたった頃アンの集中力はとっ

くに切れていた

目の前にある本を棚から引っ張り出しては戻しと同じ動作を繰り返していると、見覚えがある少し古い本が出てきる

「――――これって・・・”アーサー王子といばらの姫”だわ！」

それはアンにとってとても懐かしい本だった

王子がお姫様に一目惚れをするお話

ある日森で狩りをしていたアーサー王子は突然の雷と嵐で森に迷ってしまう。帰り道を探してみるが、辺りはだんだん暗くなっていき視界も悪い

ふと真っ直ぐ行った道の先に灯りが見えたのだが、誰かいるのかと叫んでみても返事はない

カサッと地面の草を踏む音が聞こえ、その音がするほうに馬を走らせるとそこには1人の女が立っていた

透き通るほどの白い肌に暗闇でも光り輝くブロンドの髪、青い宝石のような瞳の女に王子は一瞬で恋に落ちた

王子が口を開こうとした瞬間女は走り出す、王子も慌てて馬から降り走って追いかけた

走り逃げる女の腕を掴をつかみ名前を問うが、女は名乗ろうとはしない

王子は手に痛みを感じ視線を下に下ろすと女の腕を握っている手から血が滴っていた

驚いて手を離すと、顔を青ざめた女が一言謝り走り去ろうとした

だが、王子は血が出ているにも関わらず女の腕をもう一度掴み真っ直ぐと目を見つめて問うた

”お前は何者だ？”

王子の真剣な眼差しに逃げるのを諦めた女は名を名乗る

”トヤータ、それが私の名”

トヤータは隣国の第一王女だという

愚かなる隣国の王は自分の欲のために西の外れの森に住む魔女を怒らした

許しを乞う王に魔女は残酷にも呪いをかける
”我を怒らした罪、その身をもって償うがいい。お主の娘はまことに美しい。だが、呪いをかけてやった。その美しい風貌に寄せられてきた男どもを赤き血に染める呪いだ”
透き通るような白い肌に一触れしたら棘が突き刺さったような痛みが走り血が滴る
まるで茨の肌のように
自分の愚かさが回りに知られるのを恐れた王が自分の娘を森の搭に閉じ込めたのだと
トヤータは王子に微笑んだ
”森の出口へご案内いたします。どうか、私の事は内緒にしてください”
トヤータの案内によって無事王都に帰れた王子はトヤータの事を忘れることは出来なかった
あの日以来毎日森に訪れる王子にトヤータもいつしか心惹かれていく、だがこの恋は叶わない
呪いをかけられたこの身で、愛する人を血に染めることなどしたくない
”アーサー様、もうここへは来ないでください。私も二度と搭から

でません。誓ってくださいますか？”

”なぜ？私はトヤータを愛しているのだ”

”ですが、私にはアーサー様からいただいた愛をお返しする事ができません。この呪われた身で、忌々しいこの肌で”

”私は君を愛してるんだ。愛しくて、愛しくて仕方がないくらいに。呪いなど関係ない、我々の愛には恐れるものなどなにもない。私は今のままの君を愛している”

トヤータは涙をこぼし、王子は優しくキスをした。するとトヤータの呪いはとけ、そして2人はいつまでも幸せに暮らしていく

魔女にかけられた呪い

肌に触れるものを赤き血にそめる茨の呪い

だが、もしそんな自分を愛してくれる人ができたなら呪いは解かれるであろう

呪いを恐れず手を差し出してくれた王子による接吻によって

「素敵・・・！」

呪われているにもかかわらず愛してるだなんて、なんて一途なの！
私にもこんな事言ってくれる私だけの王子様が現れるといいなぁ
っていうか絶対現れる！！

「・・・何読んでんだ？」

「っ！？ジャ、ジャック！なんでもないわ、なんでもないのよ」

急に喋りかけられビクッとなった体で読んでいた本を隠そうとした
が、それよりも先にジャックに取り上げられてしまう

「”アーサー王子といばらの姫”？お前こんなん読むんだ～」

「う、うるさいわよっ」

「この本ってあれだろ、呪いにかけられた姫を王子が愛の力でどう
にかするって話」

ページをぺらぺら捲りながら少し呆れたように喋る

「ジャックも読んだことあるの？」

「あぁ、一度だけな。お袋がこういうの好きでさ、どこがいいんだか」

「とっても素敵なお話よ！小さい頃からのずっとお気に入りの小説よ」

「じゃあお前もあの王子のセリフ言われたいって思ってるのか？」

「な、な、な、何言ってるのよ！私は別に憧れてなんかないんだからっ！！」

「へーぇ、憧れてるわけねぇ」

「ち、違うってば！」

するとジャックはアンの目の前に片膝をつき、アンの左手を握ると指先に軽くキスをする

「君が呪われていようと私は君を愛してる。愛しくて、愛しくて、仕方がないくらいに愛してるんだ」

レオナルドとは違った漆黒の瞳で見つめられながらもう一度指先にキスをされると、一気に体の体温が高くなる

「姫は私を愛してくれますか？」

顔を真っ赤にしたアンはどうしていいか分からずあたふたと動揺してしまう

「えっ・・・えっと・・・」

ジャックの真っ直ぐな視線に耐えきれず目を左右に泳がせ一生懸命視線をさ迷わせていると、下から笑い声が聞こえてきた

「くくっ！びっくりしたか？」

「ジャック！！あなたねぇ・・・っ」

「そう怒んなよ、アンがかわいかったからちょっとからかっただけだろ？まぁ、最後の方は俺のオリジナルだけどさ」

「もう！ふざけてもこんな事言うもんじゃない！！」

立ち上がったジャックを今度はアンが見上げる形になり、ジャックの肩を手で叩く

「悪い、悪かったよ」

「もう！！」

「機嫌治せよ～、今度あれだよ、美味しいマカロンご馳走してやるからよ」

「結構よ！！」

～～～！！ドキドキなんかしてない、断じてっ！だって相手はジャックよ、冷静にならなきゃ

ちらっとジャックの方を見れば、にこっと笑って笑顔を作られる

「っ！ていうか、ジャックはここで何してるの？本探しは終わったわけ？」

「あぁ、ちょっと休憩しようと思ってさ。そろそろお茶でも飲もうぜ」

「駄目よ！お茶は本を探し終わってから、ジャックは向こうを探して」

「・・・え？」

「早く！見つけるまでお茶はお預けよ」

「・・・・・・」

ビシッと本棚を指差すアンにジャックはお茶休憩を諦めたのだった

恋のライバル？

「あ、あった―！！」

あれだけ必死に探していた本が見つかった嬉しさに思わず大声をだしてしまった

その声を聞き、飛んできたジャックに向かって見せびらかすように本を突きつける

「これでしょうっ！？やっと見つけた！」

「そう、それだ！やったなアン！！本探しはもう終了だ！」

「やったぁ！見つかってよかったわ、もう何時間も探したもの！」

大きなため息をつき、固まっていた体をぐーっと大きく伸ばす

「本当だな、あ～首が痛い」

首の関節を鳴らすジャックにアンは苦笑いを浮かべた

「・・・首、揉んであげようか？」

少し驚いた顔で弾かれたように振り向くジャックにアンは少し慌てしまう

「な、なによ？」

「・・・いや、そんな事できるのか？」

「昔からお兄様のマッサージとかしてたから得意なの。ほら、うしろ向いて」

首筋に少し冷えたアンの手が触れるとその冷たさに一瞬体がびくついたが、揉み始めるとどんどんリラックスしていった

「・・・すっげー、きもちいい・・」

「でしょ？お兄様も私のマッサージが一番って誉めてくれるのよ」

「お前本当にウィリアムの事好きだなぁ」

「当たり前よ、そういえばジャックはお兄様と仲がいいのね」

「あぁ、俺とレオナルドとウィリアムは幼馴染みみたいなもんだからなー」

「えっ？」

マッサージしている手を止めるとジャックが不思議そうにこっちを振り向いた

「あれ、知らなかったのか？まぁ俺がウィリアムと仲が良くなったのはあいつがレオナルドの友人って知ってからだしな。レオナルドとウィリアムはそれ以前からの仲らしいけどさ」

レオナルド様とお兄様が？

「ふ、ふたりはそんなに仲がいいの？」

「まぁな～、ウィリアムはレオナルドの専属護衛だしな」

初めて知った事実に困惑していると聞きなれた声が聞こえてきた

「・・・何やってるんだ？」

声の方へ視線を向けるとまさに今噂をしていた人物が

「・・・レオナルド様」

――――――――――――

アンの様子がおかしかった

俺に会いに来てくれたのが嬉しくて頬が自然と緩んだけど、アンの顔が少し強張ったのを見て一気に不安になる

アンかと思って私室に通した客はミランダだった

ミランダと俺が会う約束をしてたと勘違いしたアンの誤解を解こうとしたが、アンが最後に見せた笑みで何も言えなくなる

感情の読めない上辺な笑顔

その笑顔が気になってアンを追いかけたらジャックと楽しそうに笑ってた

無償に腹がたつ

ジャックに向けられた自然な笑顔が無償に羨ましい

「お、おぉ！レオナルド」

「・・・・」

無言のレオナルドに居心地の悪さを感じたアンはジャックの首から手を離す

ジャックもまるで見られてはいけない場面を見られてしまったように、若干挙動不審だ

「今アンに本を探すのを手伝ってもらったんだ！そ、それでな、首

が固まって痛かったからマッサージを・・・」

「・・・そうか」

レオナルドはアンを黙ったまま見つめる

「・・・具合が悪いと聞いたが」

「・・・えぇ」

「――心配していたが、ジャックの本探しに付き合っていたのなら、あまり体調が悪い訳ではないのだな」

何と返事をしていいか分からず口をつぐんだままのアンに、小さく微笑むとレオナルドは大きなため息をついた

「2人の邪魔をして悪かったな、俺は仕事が残ってるから部屋へ戻る」

「レオナルド！全然邪魔なんかじゃ・・・」

ジャックの言葉を無視してバタンッと大きな音を立てて閉めた扉にアンの肩がビクッと震えた

「・・・あ～ぁ、ありゃ完璧拗ねたな」

「・・・拗ねるって？」

「俺とアンの仲にだよ、２人きりで本探してマッサージしてもらってるのが羨ましかったんだろ」

「さぁ？どうかしらね」

「・・・・」

「レオナルド様はそんな事じゃ拗ねないわよ」

「・・・アンも素直になれよ、本当は具合なんか悪くないんだろ？」

「それは・・・」

「レオナルドとミランダが会っていたのを見て少し気まずかったとか？でもな、あれは会う約束をしていたわけじゃなくて、ミランダが一方的に会いに来たんだ」

「・・・別に会ってるのが気に入らなかった訳じゃないわ」

――――少し寂しさを感じただけ

「まぁ何にせよ、レオナルドの機嫌を直さなきゃな～」

少しめんどくさそうに頭をかくと椅子から立ち上がる

「俺はこの本を親父に届けにいかないと行けないからアンは庭に出て待っててくれ」

「庭？」

「あぁ、ここの中庭は最高だろ？そこでお茶でも飲もうぜ」

図書館から出てしっかりと鍵を施錠すると、廊下にいたメイドにお茶の準備をするように頼む

「じゃあすぐに行ってくる、また後でな～」

手を振り去っていくジャックを見送ってアンは中庭へと向かった

恋のライバル？（後書き）

最近、放射能の事が心配で心配で・・・
でも今日テレビを見れば自衛隊や救助隊の方々のおかげで、なんとか原発の機械に電気も復旧する事ができ、ひとまず危険な状態を回避できたとか。

本当に自衛隊と救助隊の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

自分が被爆するかもしれない。という恐怖の中、日本のみんなの為に頑張ってくれてありがとうございます。

涙を流しながら記者会見をする自衛隊の方を見て涙がこぼれた

自分に出来ることは節電とか募金とかしかないけど頑張りたい！って思った

みんなで頑張っていきましょう！

すれ違い？

ため息をつきたい。盛大に。

「親父、本あったぜ～」

ノックもせずに扉を開ける息子を気にもせず、机の上にある書類から目を離さない父親に歩み寄る

「これだろ？」

本を差し出すが受けとるだけで、仕事をする手を休めない

「おう、さんきゅーな！」

「礼ぐらいちゃんと目を見て言ってくれよ」

「悪い、今それどころじゃないんだ」

「はぁ？」

「明日は母さんの誕生日だろ？今日中に明日の分の仕事を終わらせたいんだ」

「あ～、そうだった！なんもプレゼント考えてなかった・・・親父は？」

「俺は今年は”南の王国と東の諸国”にしようと思って」

「それで本探しを頼んだのか」

毎年必ず母さんの誕生日に行う親父からのサプライズ

母さんの好きな小説のワンシーンを再現する

「去年はなんだっけ？」

「”幻の薔薇”いや～、あれは本当大変だった。わざわざ珍しい薔薇を隣国から取り寄せなければならなかったしな」

王女に恋した騎士が自分の恋を諦めきれずに王女に告白するシーン

『――私はあなたへの想いを諦めることはできません。ですが、私の想いをあなたが受けとる事が出来ない事も分かっています。で

すが、これだけは受け取ってもらえますか？この私の想いによく似た花達を』

「よくあんな恥ずかしいセリフ言えたな、俺には無理だ」

「何言ってんだよ、好きな女性には何でも出来るのが男ってもんさっ！」

「はいはい、じゃあ俺はそろそろ行くよ」

「そういやアンちゃん元気か？」

「・・・は？」

「なんだお前知らないのか？クォード男爵家のアン嬢、レオナルド様の幼馴染みだぞ」

「いや・・・初めて聞いた」

「昔はよく勉強が嫌で王宮を抜け出したレオナルド様の遊び相手だったんだ。でもある事件があってからそれも無くなってね」

「・・・ある事件って？」

「それは――――」

―――――――――――――――

「遅い・・・」

ずっと待たされているアンはする事もなくただ、ぼーと花達を見つめる

心地よい風が吹き、花達の甘い臭いが気持ちよくてつい目がうとうとしてしまう

ふわっと体にかけられた柔らかい布に目を覚ませばそこには

「・・・レオナルド様」

起きるとは思っていなかったのか、少しバツの悪そうな顔をするレ

オナルド

「いや、このまま眠ってしまえば風を引くんじゃないかと思って・・・余計なことをしたな、すまん」

「いえ、ありがとうございます・・・でもなぜここが？」

「俺の部屋から見えたんだ、」

「———今からジャックとお茶を飲むんですが、よかったらご一緒にどうですか？」

ジャックに言われた言葉を思い出す

”素直になれよ”

もやもやする気持ちを解決しようと、レオナルドにさっきの事を詳しく聞きたいと、少し勇気を振り絞って誘ったみたが、レオナルドは驚いた表情と少し悲しげに笑いながら小さく首をふった

「・・・いや、まだ仕事が残っているから遠慮する」

「そんなの後で片付ければいいだろ！なっ？アン」

そこにはお茶やお菓子が乗ったカートを引きながらやってきたジャ

ックが立っていた

「2人より3人でお茶飲んだ方がいいに決まってんだろ？ほら、レオナルドも椅子につけって」

テキパキと机の上にマカロンやらケーキやら3人前のお茶の準備をしているジャックを見ても、まだ佇んでいるレオナルドにアンは少し気まずそうに上目使いで喋りかけた

「実務ばかりしていては体によくありません、一杯だけでもご一緒しませんか？」

「〜〜〜・・・少しだけなら」

少し頬を赤くし遠慮がちに椅子に座る

どうやらレオナルドはアンのこの表情に弱いらしい

そんな2人を見ていたジャックは極めて明るい声を出そうとする

「よっし、これでオッケー！お茶は俺のオリジナルブレンドだから日によって味が違うけど、まあ上手いから安心して」

「ジャックってお茶も淹れられるのね」

メイドがやる仕事を1人でこなすジャックに少し感動する

「俺の親がお茶好きでさ、その影響でな。レオナルドも俺の淹れるブレンドティが好きなんだよ」

「・・・あぁ。ジャックのお茶は確かに上手いからな」

「はい、お茶が入ったぜ」

ティーカップに注がれたお茶からは甘い香りがし、ひとくち口に含めば、ほのかに酸味のある味がマカロンやケーキとよく合う紅茶だった

「おいしい・・・っ！」

「だろ？、レオナルドは？」

「うまい」

2人に褒められ満足げなジャックはマカロンを口に含みながらさっきの出来事を話し出す

「そういや、アンがウィリアムの妹って知ってたか？」

「あぁ、もちろん」

「俺はさっき知ってビックリしたぞ！兄妹ってより恋人っ！？ていう愛情表現にさらに驚いた」

「そう？あれが普通よ」

「・・・・・・」

・・・いや、絶対違うだろ

というツッコミは口に出さずに心の中にとどめておいた

「え、え～とアンは小さい頃よく王宮に遊びに来てたんだって？」

「えぇ、騎士様の宿舎によく遊びに行ってたわ。まだお兄様が見習い騎士の時だった、懐かしいな」

「ふ～ん――――それ以外の場所には行ってないの？たとえば、庭園とか・・・宿舎の裏の空地とか？」

「空地はよく行ったわ！あそこととっても綺麗な花が咲いてるわよね」

「――――じゃぁ、”秘密の花畑”は？」

「っ！おい、ジャック！」

その言葉を聞いた途端レオナルドは目を見開いた

「・・・”秘密の花畑”？」

「そうだ、空地の茂みの中に子供が通れるぐらいの通路があってさ、そこを潜ると花畑があるんだ」

――――通路？茂み？

頭が痛い

『――――アン！こっち！』

あなたは・・・・

『僕についてきて！』

誰？・・・・・

『とっても綺麗でしょ？』

その声は・・・・・

レオナルドはガンッ！と大きく机を叩くとジャックを睨み付けた

「・・・いい加減にしろ、それ以上喋るな・・！」

アンの顔は真っ青になっておりこめかみに手をあて口を押さえている

レオナルドはアンの背中を優しく撫でると腕を掴み支えながら椅子から立たせる

「大丈夫か？顔が真っ青だ」

「少し目眩がしただけです・・・・・これくらい大丈夫」

「いや、大丈夫じゃない。医務室へ行こう」

正直立っているのがやっとだったアンはレオナルドに言われるまま医務室へ歩き出す

「俺はこの片付けがすんだら行くよ、レオナルド。アンを頼むぜ」

レオナルドはジャックを睨むとなにも言わずに歩きだした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7465p/

１００本の花束を

2011年5月4日23時31分発行